



ハリネズミの孤独

特集 トーン・テレヘン『ハリネズミの願い』

親愛なるどうぶつたちへ

キミたちみんなをぼくの家へ招待します。
……でも、だれも来なくてもだいじょうぶです。

オランダでもっとも敬愛される作家による
深い孤独によりそう本。

イラストレーション・祖敷大輔





ハリネズミは、 聖人でも 世捨て人でもない ふつうのひと。 トーン・テレヘン

『ハリネズミの願い』の主人公は
寂しがりやで気むずかしく、
自分のハリが大嫌いなハリネズミ。
だれかにあそびに来てほしい、
でもやっぱりだれにも
来てほしくない——。
頭のなかは、どうぶつたちの
オソロシイ訪問でいっぱい……。

撮影 Gerdjan van der Lugt
通訳・翻訳 Saki Nagayama
取材・構成 Rieko Sugai (Shinchosha)
取材協力 Gusto di Casto



メディアにほとんど登場しないトーン・テレヘンは、自宅から待ちあわせのカフェまで、頑丈そうな黒い自転車に乗ってやってきました。一八〇センチを越す長身に、内気そうな笑顔。アムステルダムのは五月は、運河沿いや街路など、街じゅうの緑が空に映える、もっとも美しい季節です。

——『ハリネズミの願い』がどんなふうにかわったかかどうまえに、まず、子ども時代のお話を聞かせていただけますか。

父は医者で、母はロシア生まれの人でした。祖父の代からロシアに暮らし、ロシア革命の

翌年の一九一八年、一家でオランダに引きあげてきた。祖父は沈鬱な人でした。ずっとロシアに帰りがたっていた。でも結局、帰ることはできませんでした。

祖父母の家にはサモワール（ロシア式の金属の給茶器）もありましたよ。子ども時代、家族でハーグに住んでいたころは、チェーホフなどロシア演劇を上演する劇団がいくつもあって、よくうちのサモワールが舞台にのぼっていたものです（笑）。

——あなたのハリネズミは、お客さんを紅茶でもてなしますね。オランダ人はコーヒーが好きなのにとちよつと不思議だったんです。

考えたこともなかったけれど、そういえば書きはじめたときから紅茶でした。

——お生まれになったのは、オランダ南部のフォールネ・ブッテン島という島ですね。

一九四五年の夏、三歳半のとき、祖母に連れられてはじめて島を出ました。はじめて電車に乗って、北部に住む叔父夫妻を訪ねたんです。近くに森や沼地があって、アリ塚を探したり、カエルを取ったり。はじめて食べたヨーグルトや祖母と運河のほとりで摘んだブラックベリー……戦時中は食糧事情が悪かったからでしょうね、なんておいしいんだろうと思いました。夜、ベッドに横になっている



と、ガタンゴトンと電車の音が聞こえてくる。あの夏の記憶は、いまでも宝物です。

——子どものころから本がお好きでしたか。

同居していた父方の祖母が本を読んでくれましたが、二人の兄や近所の子どもたちとつばらサッカーばかりしていました。でも十三、四歳になると、ロシア文学など外国文学をたくさん読むようになりました。

とくに好きな作家は、チェーホフ、ドストエフスキー、ゴーリキー、ジョイス、ダンテ、フローベール、スタンダール、イギリスでは……きりがありませんね(笑)。詩はとりわけカヴァイスとペソア。

学生時代には鈴木大拙の『禅』も読みました。ぼくはいつでも不条理なこと、奇妙でふつうではない事柄に惹かれてきました。禅もそのなかのひとつだった。

日本文学では、大江、川端、三島、遠藤周作……ちょうど『ハリネズミの願い』を書いていたとき、オランダ語訳の『源氏物語』を読みました。これまで読んでなかでもっともすばらしい一冊です。源氏が書かれたころ、オランダの国はまだ存在すらしていなかったんです。

消え去りたい

——学生時代、医師になるか作家になるか迷われ

シアを懐かしむ祖父から聞いたお話という体裁。

ぼく自身とても好きな本です。これは特別な方法で書かれた本なんです。一九九八年頃、フランス中部の村でバカンスを過ごしたとき、仲のいい作家の友人ケースト・ヘト・ハルト宛の手紙に祖父の話を書きました。バカンスははじまったばかりだったから、あとでまたつづきを書こう、と思った。結局、三



手紙のいいところは、

書いても出版されないところ。

つじつまがあつていようが

いまいが関係ない。

急に話題を変えてもかまわない。

ませんでしたか。

いいえ。十四、五歳のころ、消え去りたいと強く思っていたんです。死ぬのではなく、消え去りたい、アフリカや南アメリカへ行きたがり帰ってきたくないと。医者を目指した第一の理由は、じつは遠くへ行ける仕事だったからです。二十八歳のとき、医療不足の地域

に医師を派遣する組織を通してケニアに赴任しました。外科と産婦人科の医師として、妻と息子もいっしょに。娘はナイロビで生まれました。

——医師と作家を何十年もつづけてこれたのはどんな経験でしたか。

うーん、ぼくはいつでも第一に医者でした。まず家庭医の仕事があつて、執筆は夜やバカンスのときだけ。自分のことを作家だと思つたことはなかった。ひとに職業を聞かれると、医者と答えていました。

——小さかった娘さんに「おはなし！ おはなし！」とねだられてつくつた物語が、創作の原点だそうですね。

そう、夜、寝るまえとか、車でどこかに行くときにねだられて、その場で考える。走りだしたときにはじめて、目的地に着いたらびたりと終わる(笑)。一九八〇年に出た詩集がぼくのはじめての本なのですが、その二年後、バカンスのあいだにどうぶつたちの物語をたくさん書いたと編集者に話したら、出版されることになったんです。ケリド社は児童書の出版社でもありますから。翌年のバカンスでもどうぶつのお話をまた書いて、そんなふうにしてこれまでつづいてきました。

——大人向けの本も書かれていますね。「パプロフスクとオーストフォールネ行ききの電車」は、口

のが面白いですね。

ハリネズミもしょっちゅう手紙を書いているでしょう？

——書くけど、出しません(笑)。

そうだね(笑)。ほかのどうぶつたちも、ぼく自身も、たくさん手紙を書く。手紙のいいところは、書いても出版されないところ。つじつまがあつていようがいまいが関係ない。急に話題を変えてもかまわない。

——「パプロフスク……」を書いていたとき、本になるとは思っていなかったのですか。

少なくとも最初は思っていなかった。どうぶつたちの話も、本にするために書いているのではなく、カレンダーにするために書いてるんだ。まあ、本になるんだけど(笑)。

——週めくりカレンダーですね。一枚に一章分のお話があつて、下のほうに日にちと曜日。上の二つの穴に赤と白の風糸を通して結んである。

ぼくがぜんぶひとりでコピーして、ひとりで綴じてるんだよ！ それを毎年、ケリド社の人たちや友人たちに贈るんです。

怒りは不必要な悪？

——ハリネズミは、内気で自信がなく、ああなつたら、こつなつたら、とよけいな心配ばかりしています。身につまされる人は多いと思いますが、オランダにもこういう人はたくさんいますか。



誕生日には書店でケーキを パトリシア・デ・フロート ケリド社編集者

わたしはトーン・テレヘンの担当編集者です。『ハリネズミの願い』など〈どうぶつたちの小説〉シリーズや、昨年刊行された『前の人生』などの小説、詩集も担当しています。

トーンは長年、お話つきの週めくりのカレンダーを自分でつくっています。それを本にしようというのはわたしのアイデアでした。トーンに頼まれたのは、カレンダーのお話に＋かーの評価をつけること。そして二人で、どの話がとてもよく、どの話がもうひとつかを話しあいます。ときには、そこからどんなテーマを引き出せるかも。テーマに沿ってトーンが新たなお話を書き、また＋とーをつけて検討する。〈どうぶつたちの小説〉シリーズはそんなふうにして仕上げられています。



左: Boekhandel Minerva Amsterdam
テレヘンの好きな街の本屋さん。ご夫婦と息子さんと経営。
右: 『大きなケーキの本』ケーキ。
上部はマジパンでできている。(撮影 Lona Aalders)



左上から
『コオロギの快復』
『ノウの存在』
『アリの出発』
『カエルの運命』
『ハリネズミの願い』
(どうぶつたちの小説)

昨年、わたしたちケリド社は創立100周年を迎えました。その記念に、トーン・テレヘンの本を10万冊つくって、オランダとベルギーのオランダ語圏の本屋さんすべてに無料で配本し、読者へのプレゼントとしました。わたしたちも本屋さんの店頭に立って、読者に直接、トーンの本を手渡したんですよ。

どうして100周年記念にトーン作品を選んだかというと、彼ほど幅広い読者に愛されている作家はいないから。子どもたち、哲学的素養のある人たち、純粋に面白い話が好きな人たち。彼の作品はさまざまな読み方ができて、読者層が並外れて厚いんです。トーンなら、ケリド社のすべての作家が彼を選んだ理由を理解でき、嫉妬することはありません(笑)。

ことしの11月18日はトーンの75歳の誕生日です。その記念に、これまでの作品に出てくるお菓子のレシピを書きおこした『大きなケーキの本』を刊行します。本屋さんがこの本を10冊と、どうぶつたちの小さなプレゼント本6巻を並べられるディスプレイを注文すると、トーンの誕生日に本の表紙とまったく同じケーキが届けられるの。お店で読者といっしょにこのケーキでお祝いしてもらおうというわけです。

アムステルダム以外の人はそうだと思う。ヨーロッパでは、バリ、アントワープ、アムステルダムなど都会の人は田舎の人より自信があるんです。ぼくはアムステルダム出身じゃないからよくわからないけど(笑)。

— どうぶつたちにまじって、突然、ことがハリネズミの家をたずねてきたりしますね。「いまは」と「まだ」と「ずっと」がダンスをしたり。そんなふうになるのは、ぼくが詩も書いているからだと思う。詩を書くときには、ぼくはいっそう自由になる……散文を書くときよりずっと自由です。

— 何度か登場するアリが、「怒りは不必要な悪だ」と言います。ハリネズミは、ゾウに家具をつぶされても、せっかくなつくったケーキをみんなにまじいと言われても、ロプスターにハリを抜かれて穴だらけにされても、涙は流すけれど怒らない。そう、ハリネズミは怒らない。でもアリは怒ることがある。ぼくは怒らない、と自分で言う人は、ほんとうは怒る人だよ(笑)。「不必要な悪だ」とアリは言うけれど、このomnodakeijkという言葉は、とても変なオランダ語なんです。「それは必要な悪だ」と言うことはあっても、「不必要な悪」だなんて。

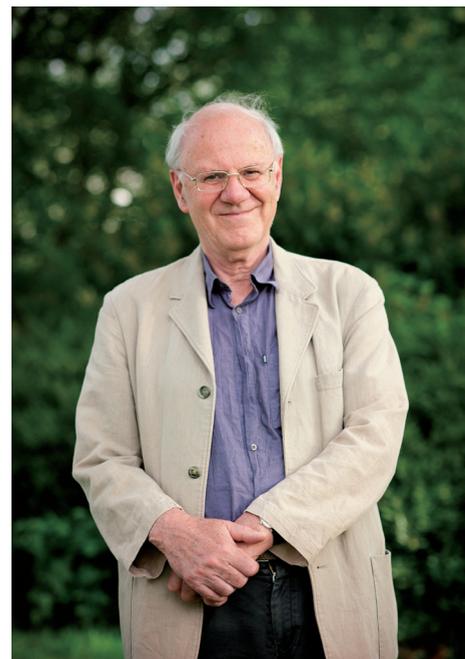
— 「フクザツ」な性格のアリらしいですね。リスも怒らない。ほかの本で、ゾウがリスの家のランプの紐にぶら下がって、「ぜったいに怒らないの?」と聞くけれど、怒らない。そういえば、ぼくの物語の中心的などうぶつたちは怒らないかもしれないね。ヒキガエルは怒る。そういう性質だから。カラスも性質上怒る。ロプスターも怒る。アリは怒るとシニカルになると思う。『アリの怒り』、これが来年の本のタイトルかもしれない(笑)。

— 怒らない人がお好きなんですか。ご自分もあまり怒らない?

ケニアにいたとき、ぜったいに怒らない神父がいました。とてもやさしい人で、いまは南リンブルフに住んでいる。ぼくの父もほとんど怒らなかつた。だいたいいつでもなんでも、それでいい、と思っている人だった。でも怒ったほうがいい状況もある。ぼくは場合によっては怒るけれど、お手本は、人生でいちども怒ったことのないその神父でした。フランス・モル(モグラ)という名前(笑)。

これはオランダではふつうの名前なんです。— どんな目にあっても怒らないという主人公は、いそうでもないですね。

でもハリネズミはけっして聖人ではないし、世捨て人でもない。ふつうの人なんです。



TOON TELLEGEN

1941年、医師の父とロシア生まれの母のもと、オランダ南部の島に誕生。ユトレヒト大学で医学を修め、ケニアで3年間、マサイ族の医師を務めたのち、アムステルダムで開業医に。1984年、幼い娘のために書いたどうぶつたちの物語『一日もかかさず』を刊行。以後、どうぶつを主人公とする本を50作以上発表し、国内外の文学賞を多数受賞。オランダ出版界と読者の敬愛を一身に集める作家・詩人。

— 「フクザツ」な性格のアリらしいですね。

リスも怒らない。ほかの本で、ゾウがリスの家のランプの紐にぶら下がって、「ぜったいに怒らないの?」と聞くけれど、怒らない。そういえば、ぼくの物語の中心的などうぶつたちは怒らないかもしれないね。ヒキガエルは怒る。そういう性質だから。カラスも性質上怒る。ロプスターも怒る。アリは怒るとシニカルになると思う。『アリの怒り』、これが来年の本のタイトルかもしれない(笑)。

— 怒らない人がお好きなんですか。ご自分もあまり怒らない?

ケニアにいたとき、ぜったいに怒らない神父がいました。とてもやさしい人で、いまは南リンブルフに住んでいる。ぼくの父もほとんど怒らなかつた。だいたいいつでもなんでも、それでいい、と思っている人だった。でも怒ったほうがいい状況もある。ぼくは場合によっては怒るけれど、お手本は、人生でいちども怒ったことのないその神父でした。フランス・モル(モグラ)という名前(笑)。

これはオランダではふつうの名前なんです。— どんな目にあっても怒らないという主人公は、いそうでもないですね。

でもハリネズミはけっして聖人ではないし、世捨て人でもない。ふつうの人なんです。

Het verlangen van de egel

テレヘンさんが書くとコトバも生きものになる、
ハリネズミの孤独が私たちの孤独になる。

——谷川俊太郎



ハリネズミの願い トーン・テレヘン

長山さき・訳 祖敷大輔・イラスト
978-4-10-506991-9 定価(本体1300円+税)

ぼくの家にあそびに来よう、
キミたちみんなを招待します。
……でも、
だれも来なくてもだいじょうぶです。
臆病で気むずかしいハリネズミに
友だちはできるのか？
これは、あなたとわたしのための物語。

取り越し苦労の天才、ハリネズミ君。
とても他人とは思えない。

——小川洋子

6月30日
発売!



story

ある日、自分のハリが大嫌いで、ほかのどうぶつたちとうまくつきあえない臆病で気むずかしいハリネズミが、誰かを家に招こうと、招待状を書きはじめます。「親愛なるどうぶつたちへ キミたちみんなをぼくの家へ招待します」ところがすぐに不安になって、こう書き足してしまいます。「……でも、だれも来なくてもだいじょうぶです」。もしもクマがきたら？ ヒキガエルがきたら？ ソウがきたら？ フクロウがきたら？——さまざまな動物たちのオソロシイ訪問が、孤独なハリネズミの頭のなかで繰り広げられます。笑いながら、身につまされながら、やがて祈るような気持ちになりながら読んでいくと、とうとうさいごにノックの音が……。

新潮社

<http://www.shinchosha.co.jp/harinezumi/>